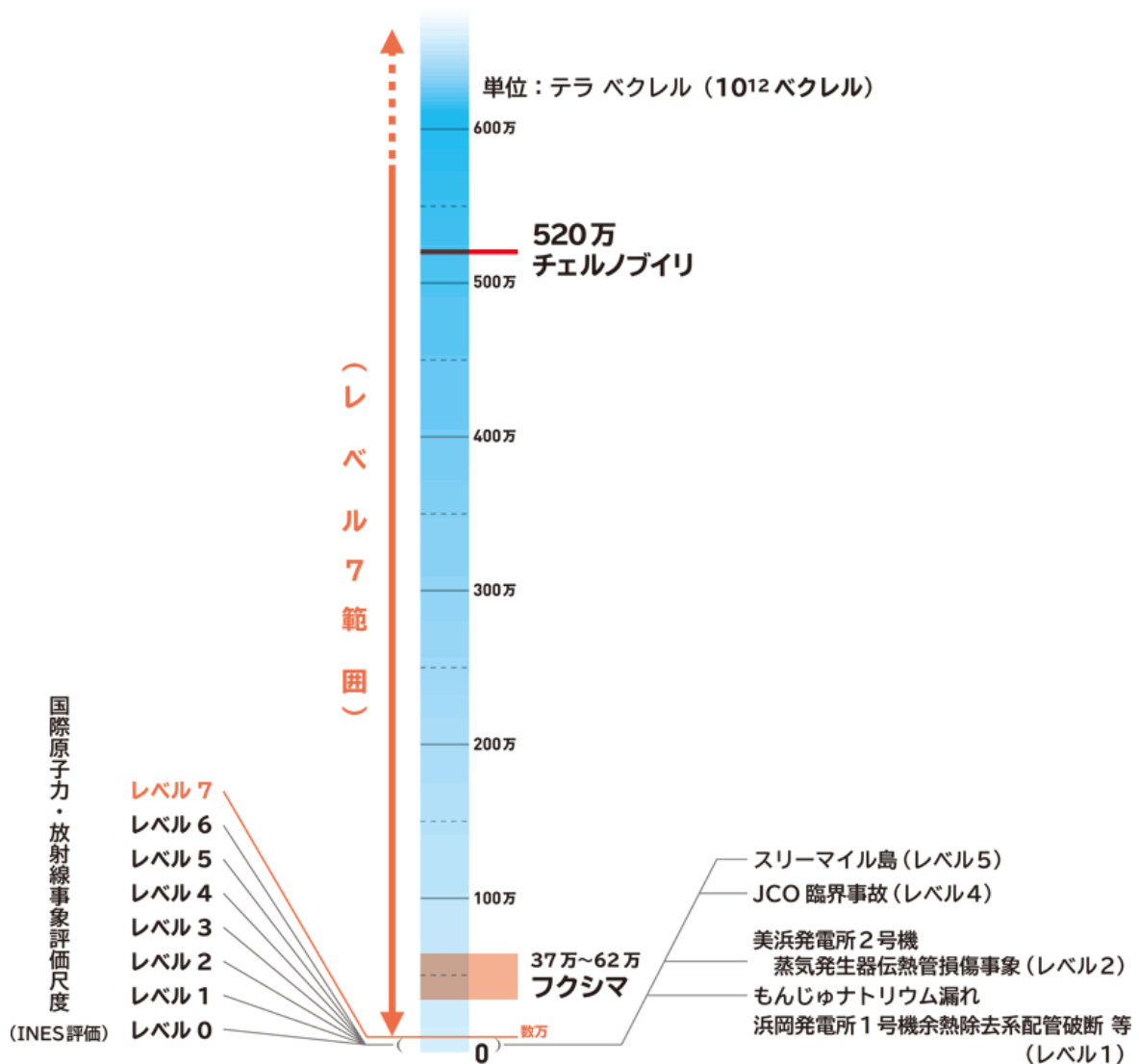


QA2 東京電力福島第一原子力発電所事故とチェルノブイリ原発事故とは、影響の度合いは違うのですか。

違います。

東京電力福島第一原子力発電所事故発生以来の放射性物質の総放出量で比較すると、現時点で、今回の事故はチェルノブイリ事故のときの約10分の1です。ただ、原子力施設事故の指標として用いられている「INES 評価」という物差しでは、レベル分けは「7」までしか分類が無いため、福島もその10倍のチェルノブイリも同じランクに入ってしまうという事です。

放射性物質の総放出量



東京電力福島第一原子力発電所事故とチェルノブイリ原発事故の国際原子力・放射線事象評価尺度（INES）※評価は同じレベル 7 ですが、大気への放射性物質の放出量を比べると、東京電力福島第一原子力発電所事故はチェルノブイリ原発事故の約 1 割程度と見込まれています（下表参照）。

そのほか、以下の違いがあります。

イ) チェルノブイリ原発事故では急性の大量被ばくによる死者が 28 人出ましたが、東京電力福島第一原子力発電所事故ではそのような死者は発生していません。

ロ) 東京電力福島第一原子力発電所事故では原子炉建屋の水素爆発が発生しましたが、チェルノブイリ原発事故では原子炉が爆発し、多量の放射性物質が拡散しました。

ハ)

東京電力福島第一原発事故とチェルノブイリ原発事故による放射性物質放出量の差

放出核種	東京電力福島第一での想定放出量		(参考) チェルノブイリでの放出量
	評価1 原子力安全・保安院発表 (平成23年6月6日)	評価2 原子力安全委員会発表 (平成23年8月24日)	
ヨウ素131 …(a)	16万テラベクレル (1.6×10^{17} Bq)	13万テラベクレル (1.3×10^{17} Bq)	180万テラベクレル (1.8×10^{18} Bq)
セシウム137	1万5千テラベクレル (1.5×10^{15} Bq)	1万1千テラベクレル (1.1×10^{16} Bq)	8万5千テラベクレル (8.5×10^{16} Bq)
(ヨウ素換算値) …(b)	61万テラベクレル (6.1×10^{17} Bq)	44万テラベクレル (4.4×10^{17} Bq)	340万テラベクレル (3.4×10^{18} Bq)
(a) + (b)	77万テラベクレル (7.7×10^{17}Bq)	57万テラベクレル (5.7×10^{17}Bq)	520万テラベクレル (5.2×10^{18}Bq)

15% 11%

それぞれ約 1 割程度

※：国際原子力・放射線事象評価尺度（INES）とは、原子力発電所等の事故・トラブルについて、それが安全上どの程度のものかを表す国際的な指標です。東京電力福島第一原子力発電所事故における国際原子力・放射線事象評価尺度（INES）評価の考え方については、原子力安全に関する国際原子力機関（IAEA）閣僚会議に対する日本国政府の報告書の添付IX-9をご参照ください。

<http://www.kantei.go.jp/jp/topics/2011/pdf/app-chap09.pdf>

出典：復興庁「避難住民説明会等でよく出る放射線リスクに関する質問・回答集」より作成
出典の公開日：平成 24 年 12 月 25 日

本資料への収録日：平成 25 年 1 月 16 日